



# 第6分科会



Ⅱ 教育課程／健やかな体

健やかな体を育む  
カリキュラム・マネジメントの推進

西山公園(鯖江市)

# 健やかな体



SA 歯ピカプロジェクト

## 1 研究課題

### 健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進

## 2 趣旨

科学技術の発達や情報化の進展などの社会環境の急激な変化は、生活環境に大きな影響を及ぼし、手軽な遊び場の減少、少子化や学校外での遊び仲間の減少も相まって、体を動かす機会が減少している。そして、体力・運動能力の低下にとどまることなく、肥満や生活習慣病、人間関係の希薄化やストレスの増大など、子どもたちの心身両面にわたる健康上の問題を生み出している。

こうした課題を乗り越え、生涯にわたって健康で安全な生活を送ることができるよう、必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行うことができる力を、子どもたち一人一人に育むことが強く求められている。

学校においては、子どもの心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する必要がある。そして、子ども自身が運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図るために、主体的・協働的な学習をしていくことができるよう、学校全体で組織的・系統的な指導を推進していくことが重要である。

本分科会では、子どもたちが生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現し、健康で安全な生活を営む実践力を育む教育活動を家庭・地域と密接に連携・協働しながら推進するためのカリキュラム・マネジメントについて具体的方策と成果を明らかにする。

## 3 研究の視点

### (1) 生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進

生活環境の変化から日常的な運動が減少してきており、子どもたちの体力・運動能力は依然として低い状況が見られる。また、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向が見られる。

これらのことから、子どもたちが基礎的な身体能力を身に付け、生涯を通じて運動に親しみ、健康・安全で活力のある生活を送るための資質や能力の素地を育てていくことが学校教育に期待されている。そのために、体育科学習では、全ての児童が、楽しく、安心して運動に取り組むことができる活動を意図的・計画的に体験させる必要がある。また、学習したことを家庭や地域社会などで生かすことができるような指導の在り方を工夫することが重要になる。

この視点に立ち、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動を推進するために校長の果たすべき役割と指導性を明らかにする。

### (2) 健康で安全な生活を営む実践力を育てる教育活動の推進

児童期は、生涯にわたって心身ともに健康で過ごすための基礎を培う時期であり、小学校における健康教育は他のライフステージにもまして重要な意義と役割をもっている。

学校においては、自己の健康に関心をもち、心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康で安全な生活を送ることができる資質や能力を培うことが求められている。

校長は、計画的・継続的なカリキュラム・マネジメントに努め、家庭・地域社会との連携を図りながら健康教育を推進していかなければならない。

この視点に立ち、健康で安全な生活を営む実践力を育てる教育活動を進める上での校長の役割と指導性を明らかにする。



## 第6分科会

**研究の視点** 生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力を育てる教育活動の推進

# 研究発表題 **生涯にわたり、主体的に運動やスポーツに親しむ態度を育む健康教育のカリキュラム・マネジメント**

富山県射水市立中太閤山小学校長 **山口 健治**

### I 研究の趣旨

近年、パソコン等の情報端末と向き合う時間が長くなるなど、ライフスタイルが大きく変化したことにより、児童の運動習慣や運動能力・体力に二極化がみられ、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下等、心身の健康に関わる様々な課題が生じている。また、少子高齢化が進む中、生涯にわたり健康な生活を営むことは、幅広い世代における重要事項である。

このような中、体育科新学習指導要領の目標にも、「生涯にわたる心身の健康の保持増進や豊かなスポーツライフの実現」が掲げられた。また、体力や技能の程度、年齢や性別、障害の有無等に関わらず運動やスポーツの楽しみ方を共有できるよう、「すること」に加えて、「みること」「支えること」「知ること」等、多様な関わり方が示された。

大相撲の朝乃山やNBAの八村塁等、県出身アスリートの活躍に沸く富山県。また、東京オリンピック・パラリンピック開催により、県民のスポーツへの関心が高まっている。この機を捉え、校長のリーダーシップの下、児童が興味・関心・適正等に応じて、生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、主体的に実践する態度を育む健康教育のカリキュラム・マネジメントについて、次の視点から取組を紹介する。

〈県の施策「元気っ子育成計画」に基づく取組〉

- 1 「元気っ子育成計画」の作成
- 2 「元気っ子育成計画」の実践
  - (1) 「みんなでチャレンジ3015」の活用
  - (2) 業間運動・体育科授業等の充実
  - (3) 家庭・地域等との連携

### II 研究の概要

〈県の施策「元気っ子育成計画」による取組〉

#### 1 「元気っ子育成計画」の作成

「元気っ子育成計画」とは、運動が好きでたくましい心と体をもつ子どもを育成するために、県内の幼稚園・小中学校が、各校の実態に基づき、行う運動や体育・スポーツに関する内容をまとめた年間計画である。体力の向上と健康の保持増進を目的に、各校等が、その計画の中に、「運動機会の確保」「望ましい生活習慣の形成」の視点を位置付け、学校規模や児童の実態、地域性等に応じて独自の計画を作成するものである。



元気っ子育成計画



健康づくりノート

実態の把握には、体力・運動能力調査の結果のみならず、授業や業間等の様子、県発行の「健康づくりノート」から得られる生活習慣の傾向からも検討することとしている。

校長は、実態を的確にとらえるとともに、校内の推進体制を整え、取組の内容や重点、実施時期等を決定し、計画的に点検・修正を行いつつ、自校の目標達成のために必要な取組を行っていく。また、「元気っ子育成計画」においては数値指標を設定しており、評価の観点を事前に明確にしておくよう配慮している。

#### 2 「元気っ子育成計画」の実践

##### (1) 「みんなでチャレンジ3015」の活用

「みんなでチャレンジ3015～立山編～」は、

屋内外で手軽にできる運動を紹介するとともに、取り組んだ運動量を数値化し、児童が計 3015 ポイント達成を目指し、継続的に運動に取り組めるよう工夫した体力づくりカードである。なお、3015 という数値は、大伴家持が歌に詠んだ県内最高峰「立山（大汝山）」の標高 3015 m にちなんだものである。この体力づくりカードを活用して県内各校で運動の時間と場を設定し、どの児童も一定時間、運動に親しめるようにしている。また、「みんなでチャレンジ 3015」は、親世代が小学生だった昭和 59 年から実施されており、現在では家庭での体力づくりにおいても親子で取り組みやすい内容となっている。

新学習指導要領改訂のポイントの一つである「個々の適性等に応じた運動やスポーツとの多様な関わり」を児童に促す目的で「富山湾編」が昨年度から加えられた。このカードでは、スポーツ観戦やスポーツに関する会話等 7 項目の実践を示し、児童に、「見る」「支える」「知る」活動への意識付けを図っている。

このような 2 種類のカードで、「元気っ子育成計画」の趣旨や枠組みを生かしながら、全校で、運動習慣の形成やスポーツへの関心の高まりを目指している。校長が、児童の実態や地域性等に応じて独創性のある活用をすることが大切である。



みんなでチャレンジ 3015～立山編～  
運動遊びプログラムを充実させ、体力向上を図る。



みんなでチャレンジ 3015～富山湾編～  
「見る」「知る」など、運動やスポーツと多様な関わりがもてるようにする。

体力づくりカード「みんなでチャレンジ 3015」

## (2) 運動の楽しさを味わう業間運動・体育科の授業等の充実

### ア 業間時における運動習慣の形成

A 校では、業間時に、週 3 日、全校児童で多様な運動に親しむ場を位置付けている。全学年が一斉に取り組むため、発達の段階や個々の能力に応じた活動ができるよう場づくりや評価カードを工夫している。



敏捷性を養う



投力を養う

運動種目は、敏捷性や投力、跳躍力、握力、体幹を鍛えるもの等、ねらいも種類も多様であるが、どの運動も手軽に取り組める運動となるよう配慮している。

児童に強いる運動とするのではなく、教師も児童と運動の楽しさを共有することにより、児童の運動に対する意欲の高まりがみられるようになる。

### イ 体育科の授業の充実

B 校では市スポーツ指導者派遣事業を活用し、投力や器具を使った運動技能の向上を図るため、市役所や市体育協会から指導者を招聘している。若手教員にとっては指導法を学ぶ好機となり、学んだことを即、指導に生かすことができる。また、児童が成長していく姿を目にすることでやりがいにもつながっている。

本県では、地元のプロ野球チームやプロバスケットボールチーム、実業団相撲部を招聘し、児童に多様なスポーツとの関わり場の保障してきた。また、昨年度は、ワールドカップ女子バレーボールの公式戦が富山市で開催され、児童による観戦の機会も設けた。



スポーツ指導者派遣事業

普段身近に接する機会の少ないトップアスリートと触れあうことで、子どもたちは憧れを抱き、そのスポーツを始めるきっかけとなることもある。また、トップアスリートとともに、実際に体を動かすことにより、多様なトレーニングの仕方やスポーツの奥深さを学ぶこともできる。

新学習指導要領に、『『する』ことだけでなく、『みる・支える・知る』といったスポーツと多様な関わりをすること』が明示されたこともあり、今後一層このような学びの場を増やしていくためのマネジメントを心掛けていく必要がある。

#### ウ 児童が主体的に取り組む運動機会の設定

C校では、児童が、多様な運動に主体的に取り組むことを願って、「スポーツスタンプラリー」という取組を行っている。これは、運動する種目と場をグラウンドに複数用意し、児童が各コーナーをスタンプラリー形式で巡るというものである。この取組は、児童のアイデアによるもので、ルールも児童が考え、各自が種目を選んで取り組めるよう工夫したものである。このように、児童のアイデアを生かすことが自己有用感を高め、主体的な体力向上の取組につながっている。

さらにC校では、過去に取り組んでいた運動の場も復活させて加え、6種目の運動から児童が選択して取り組む「スポーツバイキング」というイベントも実施した。「スポーツ



バスケットボール選手招聘



実業団相撲部招聘



ワールドカップ観戦

スタンプラリー」でも「スポーツバイキング」でも、運動量を「運動貯金カード」に記録していくというユニークな取組である。

自分に合った運動や必要な運動を自分で考え自分で選択することは、生涯にわたって運動に親しむ態度を養う上でも大切なことである。また、児童が主体的に取り組む場づくりは、運動好きな児童を育成する重要な要素といえる。

児童のアイデアを生かすことは、運動への意欲化を図り主体性を育む上でも重要であるが、それに伴って、使用するカード類が多くなりがちである。アイデアを生かしつつも、カードの枚数が増して、児童が困惑しないよう配慮や工夫を忘れないようにしたい。

#### エ 地区全体で取り組む運動機会の設定

D地区では、「小学校スポーツ推進連盟」を組織し、連盟が主体となって、「体力向上推進事業」を展開している。低学年には経験型や達成型の遊びや動き、中高学年には運動要素の基礎となる運動を提示し、運動や遊びに進んで親しむ児童の育成を期し、記録に応じて金・銀・銅の基準を設けるなどして意欲化を図りながら、地区一斉に取り組んでいる。また、競技力向上も視野に入れ、地区の全6年生が自己ベスト更新を目指して参加する陸上競技記録会を設定している。さらに、的確な指導ができる指導者を育成するために、「指導者講習会」を開催し、人材育成にも努めている。



スポーツバイキング



スポーツ推進連盟主催競技会

スタンプラリーカード

スタンプラリーカード

スタンプラリーカード

スタンプラリーカード

スタンプラリーカード

### (3) 運動やスポーツに親しむ児童を育むための家庭・地域等との連携

家庭や地域が学校の取組を理解し、連携して児童の体力向上や運動習慣形成に取り組むことで継続的に運動する環境が整い、運動に親しむ態度は確かなものとなる。学校、家庭、地域が連携して進めている取組を2例紹介する。

#### ア 土曜スポーツ活動

E校には、野球やバレーボール等のスポーツ少年団に所属し土曜・日曜にスポーツに親しむ児童が全校児童の3割近くいるものの、全く運



土曜スポーツ活動

動しない児童も同様に3割近くいた。そこで、土曜日の午前に学校の体育館に参加希望児童を募り、地域や家庭からバドミントンや卓球、フレッシュテニス、ビーチボール等の指導者を招聘し、保護者と教職員が指導をサポートしたり、会場設営等を手伝ったりしている。毎回20名程の児童が参加し、個々の技能や体力に応じたスポーツを楽しむ機会としている。

#### イ 総合型地域スポーツクラブとの連携

F校では、総合型地域スポーツクラブの出前事業を年間12回実施している。参加者は主に学童保育の児童であるが、登録すれば1年生から3年生まで誰でも参加できる。

総合型スポーツクラブの派遣講師は、長年同じ指導者が務め、児童の特徴を熟知しているため、児童のやる気を巧みに引き出しながら、回転感覚、逆さ感覚等、低学年に身に付けさせたい力を効率よく指導している。先を見据えて人材を確保し、無理のない運営とすることが肝要である。



講師による指導

## Ⅲ まとめ

### 1 成果

(1)「元気っ子育成計画」の取組では、児童の創意を生かした活動や地域内の学校・関係機関等と連携した活動等、各校や地域の実態に応じて特色ある実践がなされている。

校長が、児童の実態や地域の実情を的確に把握し、実践に結び付けることで活動が活性化された。

(2)「元気っ子育成計画」により、運動やスポーツに親しむ環境づくりを行うことで体育科の授業を核に、学校の教育活動全体を通じて定期的な運動の機会を設定することができ、多くの児童に一定の運動量を確保することができた。

### 2 課題

(1)教師は、児童に多様な運動を体験させ運動技能の向上を図ることを目指しがちであるが、技術指導を偏重すると、本来の目的であるスポーツや運動に親しむ素地づくりにはつながりにくい。「元気っ子育成計画」作成段階から、適切な方向性を示し、チームとして取り組む必要がある。

(2)「みる」「支える」「知る」といった多様な運動やスポーツとの関わりを意識化し実践するためには、家庭や地域との連携が不可欠である。学校・家庭・地域が無理なく連携し合える体制づくりが求められる。

(3)一層の働き方改革が求められる中で、豊かなスポーツライフを意識した取組を模索し推進するためには、学校から情報発信するだけでなく、地域や家庭から広く情報収集し連携に生かしていく必要がある。

(4)昨年2月に第1回富山県スポーツ推進審議会が開催され、2020年を起点とする新たなスポーツプラン策定に向け始動した。校長には、学校が抱える課題を解決しながら、より高い目標に向け学校内外の人的・物的資源を的確に把握し有効活用することが求められる。また、小中9か年を見通した育成計画の共有が不可欠で、校長間の連携が重要である。



## 第6分科会

研究の視点 健康で安全な生活を営む実践力を育てる教育活動の推進

# 研究発表題 心身の健やかな成長の基盤となる生活習慣を育む学校づくり

福井県鯖江市吉川小学校長 西野 浩美

第6分科会

### I 研究の趣旨

鯖江市では、食育を基盤とし、生きる力を育む学校教育を推進してきた。市の「教育の振興に関する政策の大綱」では、食育を通して、健康な心身の育成や伝統的な食文化の継承を図るとともに、食の恵みに対する感謝の心や「食と環境」「地産地消」など社会的課題に向き合う心を育てることをうたっている。また、鯖江市では、家庭・地域との連携を生かした歯と口の健康づくりを「SA 歯ピカプロジェクト」と銘打ち、校長会で共通理解を図りながら継続的な取組を重ねてきた経緯がある。

生涯にわたって健康で安全な生活を送ることができる資質や能力を培い、家庭や地域と密接に連携・協働しながら教育活動を推進するための校長の役割について、次の視点からの具体的な取組を紹介する。

#### 1 カリキュラム・マネジメントの視点

- (1) 健康で安全な学校の実現を目指すことを、学校経営上の重要な課題として位置付ける。
- (2) 年間を通して組織的に、いつ、誰が何をどのように取り組むのかを明確にする。
- (3) 実態調査をもとに、取り組むべき内容を精選し改善を図る。

#### 2 家庭や地域・各種関係機関との連携の視点

- (1) 市の施策を活用して、関係機関との協働をスピード感をもって進める。
- (2) 校区の学校と連携した体制づくりの推進を図る。



### II 研究の概要

#### 1 健康な心身の育成を目指す食育の推進

～カリキュラム・マネジメントを通して～

##### (1) 食に関するカリキュラムの見直し

###### ア スクールプランへの位置づけ

「食育が健全な人格形成の基盤である」という鯖江市の方針を踏まえ、校長はそれぞれの学校の実態に合わせ、スクールプランの中に「食育」を位置付けた。実践に当たり、全ての教職員が食育の意義やそれぞれの目標等を共有し、同一歩調で取り組めるよう、働きかけたり研修したりした。

###### イ PDCA サイクルの確立

栄養教諭が中心となって作成する食育カリキュラムを、より効果的、効率的な教育活動となるように、アンケートを活用して見直しを図った。

まず、カリキュラム作成に向けて、児童や保護者の実態を把握するため、鯖江市独自で食育に関するアンケートを実施した。児童の生活習慣や健康、体力などの実態に応じて、各学校で重点的に取り組む項目を決めた。さらに、学年や児童の実態に応じて、担任が、栄養教諭や養護教諭との TT 授業を実施できるように改善した。

	6年	5年	4年	3年	2年	1年
生活	みんなががっこうを愛するこころ	動物のからだのほたらき たねをまごころ たねをまごころ たねをまごころ	動物のからだのほたらき たねをまごころ たねをまごころ	動物のからだのほたらき たねをまごころ たねをまごころ	動物のからだのほたらき たねをまごころ たねをまごころ	動物のからだのほたらき たねをまごころ たねをまごころ
総合	動物を育てよう 5年 6年	種まき・苗植え 種まき・苗植え 種まき・苗植え	種まき・苗植え 種まき・苗植え 種まき・苗植え	種まき・苗植え 種まき・苗植え 種まき・苗植え	種まき・苗植え 種まき・苗植え 種まき・苗植え	種まき・苗植え 種まき・苗植え 種まき・苗植え
その他の教科	4年国語「白いぼうし」 5年国語「春の楽しみ」 6年国語「カレーライス」	1年国語「なぞなぞあそび」 6年国語「春の楽しみ」 6年国語「カレーライス」	1年国語「なぞなぞあそび」 6年国語「春の楽しみ」 6年国語「カレーライス」	1年国語「なぞなぞあそび」 6年国語「春の楽しみ」 6年国語「カレーライス」	1年国語「なぞなぞあそび」 6年国語「春の楽しみ」 6年国語「カレーライス」	1年国語「なぞなぞあそび」 6年国語「春の楽しみ」 6年国語「カレーライス」
道徳	1年おはねになっているひとにかんしやして	3年どの仕事も大切なんだ	2年自分でやることはしっかり	4年環境を守りたい		
給食指導	給食の準備・後片付けをてきよくしよう	食器を正しく洗って食べよう	よくかんで食べよう	身のまわりを清潔にしよう		
低学年	5年の行事や食育、お話を聞かせる	正しい食器の使い方を知る	よくかんで食べよう	身のまわりを清潔にしよう		
中学年	5年の行事や食育、お話を聞かせる	正しい食器の使い方を知る	よくかんで食べよう	身のまわりを清潔にしよう		
高学年	5年の行事や食育、お話を聞かせる	正しい食器の使い方を知る	よくかんで食べよう	身のまわりを清潔にしよう		
特別活動	1年 2年 3年 4年 5年 6年	1年 2年 3年 4年 5年 6年	1年 2年 3年 4年 5年 6年	1年 2年 3年 4年 5年 6年	1年 2年 3年 4年 5年 6年	1年 2年 3年 4年 5年 6年
給食時間の一口指導（食べ方・献立・マナー・各月の給食のあてなど、毎日の給食に関連する内容）						

食に関する年間指導計画

また、各学校共通の指導内容として、「給食時間の指導」「食文化の伝承・特色ある献立」「鯖江の旬の食材」「給食だよりテーマ」を示し、それぞれの学校での計画的な指導につなげた。

## (2) 実際の取組

### ア 栄養教諭と連携した食育指導

学級活動の時間に、担任が栄養教諭や養護教諭とのTT授業に取り組んだ。朝食摂取率や朝食の中身、バランスのよい食事、睡眠と運動の関係など、児童の実態を把握している担任と、専門知識をもつ栄養教諭がチームを組んで授業に取り組むことで、児童の食に対する関心や意欲を高めることができた。

### イ 伝統的な食文化の継承指導

市家庭科部会が中心となり、農林政策課や市内の料亭の協力を得て、5年生を対象とした「うまみの授業」をカリキュラム上に位置付けた。かつおぶし、こんぶ、煮干しなどのだしを味わい、和食には欠かせない「うま味」について学ぶ内容とした。プロの料理人が作った5種類の味噌汁で、児童はにおいや味などを比較し、それぞれのだしの特徴について学び、伝統的な食文化について理解を深めた。

この学習を踏まえて、家庭科でみそ汁を作る活動に取り組むことで、目的意識をもって主体的に取り組む児童の姿が見られた。

### 【報恩講テーブルマナー体験学習】

北中山小学校では、公民館や婦人会の協力を得て、6年生の11月に報恩講料理の学習を実施している。あらたまった場での和食の「おもてなし」や、伝承されている行事について地域の方々から学ぶ豊かな体験学習となっている。



## 【チャレンジ座ふるさと体験学習】

豊小学校では、6年生が2月に公民館や農林政策課の協力を得て、地場産野菜で作った伝統料理をバイキング形式でいただく体験学習を実施している。地域と密接に結びついた食文化について学び、ふるさとに愛着と誇りをもつことにつながっている。



### ウ 食の恵みに感謝する活動



地域のボランティアの協力を得ながら、野菜や米の栽培や収穫を体験する活動を、他教科領域と関連させながら実施できるようにカリキュラムの見直しに取り組んだ。道徳科や集会活動では、勤労の苦勞や喜び、協力し合うことの楽しさ、自然の恵みへの感謝や地域の方々への感謝を表現する児童が増えた。

市内全ての小学校には、地場産野菜について身近に学ぶことのできる学校給食畑がある。栽培された野菜は「地場産野菜学校給食の日」の給食の食材として提供され、郷土の農産物への関心を高めている。また、今日的な課題である「食の安全」や「地産地消」について学ぶ場としても活用されている。

市内全ての小学校には、地場産野菜について身近に学ぶことのできる学校給食畑がある。栽培された野菜は「地場産野菜学校給食の日」の給食の食材として提供され、郷土の農産物への関心を高めている。また、今日的な課題である「食の安全」や「地産地消」について学ぶ場としても活用されている。



### エ 家庭への情報発信

学校での食育の様子を知らせることで、家庭での食に対する意識を高めたり生活習慣を見直したりする取組につながることを目指して、食育だよりや学校だより、ホームページで



情報を発信している。「親子クッキング」や「マイおにぎりデー」の取組など、家庭の理解と協力を得ることが不可欠の実践である。



## 2 実践力を育てる歯・口の健康づくりの推進

～家庭・地域・関係機関との連携を生かして～

### (1) 学校保健総合支援事業との連携

平成 29 年度の「学校保健総合支援事業」の委託を受けた歯・口の健康づくりの取組を「SA 歯ピカ」と名付け、養護教諭を中心とした学校体制「SA 歯ピカプロジェクト」を立ち上げた。また、中学校区での取組を推進することで、小中継続した指導ができ、個人の歯みがき習慣の定着や治療の向上に効果があると考え、地域学校保健委員会を開催した。

校長は、実態を的確に捉えるとともに、取組の内容や実施時期等を決定し、計画的に点検・修正を行いながら、目標達成のための指導助言に取り組んだ。

#### ア 実態調査

対象学年を小学 3 年生と 5 年生、中学 1 年生の児童生徒と保護者に絞り、歯みがきの実態と歯の健康に関する意識調査を実施した。

#### 児童・生徒アンケート（回答者数 2,093 名）

- ① 朝・昼（給食後）・夜の歯みがき
- ② 歯をみがくときに気をつけていること
- ③ むし歯があった場合、歯医者に行くか
- ④ 昨年度の歯科検診でむし歯があったか

#### 保護者アンケート（回答者数 2,020 名）

- ① 子どもの朝・夜の歯みがき
- ② むし歯があった場合、歯医者に行くか
- ③ 歯医者に行かない理由
- ④ 子どもの歯や口の健康づくりで気をつけていること

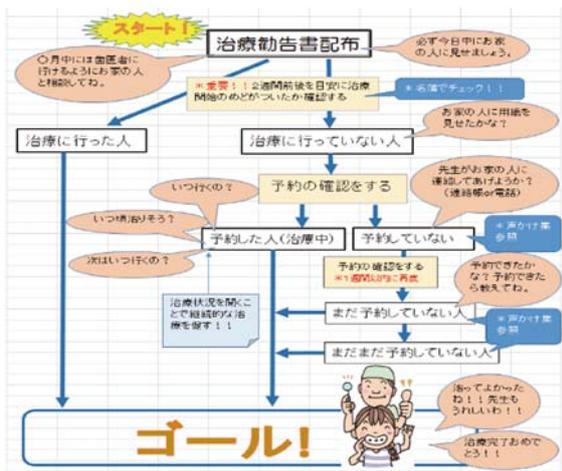
アンケートによる実態調査から、朝・昼・晩の歯みがきの習慣化、そして、むし歯があっても歯医者に行かない、あるいは行けないという児童生徒にどのように働きかけるかという二つの課題が見えてきた。そこで、学校と家庭、地域の歯科医との連携、さらに教職員の意識改革の視点を切り口に取組を始めた。

#### イ 実際の取組

市保健安全研究部会が中心となって、夏季休業中に、保護者や市内の教職員を対象とした学習会を実施した。「歯科医が語るお口の事情」と題して、歯みがきの大切さや歯の早期受診の必要性を話していただいた。その後のワークショップでは、歯科衛生士によるブラッシング指導や、歯垢の細菌を顕微鏡で見る体験などを行った。



う歯保有者への受診勧告に関しては、どの学校でも歯科検診後の治療勧告書を配布する。今回、治療率向上のために、市保健安全部会が中心となってマニュアルを作成し、担任の働きかけの意識化を図った。さらに、校長会で、マニュアル活用の推進を共有したことにより、小中学校で連続性のある治療勧告につながった。



鯖江市の小学校のう歯治療率は、H28年度に81.99%、H29年度に89.49%、中学校では、H28年度に62.06%、H29年度に85.12%に上昇した。特に、市全体での学習会や治療勧告の取組を通して、中学校での治療率の大きな上昇が見られた。

## (2) 中学校区の連携

各中学校区では、スカイプを活用して地域学校保健委員会を行った。「給食後の歯みがき実施100%をめざして」をテーマに、各学校の保健委員会が発表し、それぞれの取組の共有化を図った。保護者代表や市内の学校歯科医も参加し、感想や意見を話し合う交流の場となった。

また、この地域学校保健委員会を受けて、冬季休業中に各中学校区で統一した歯みがきカレンダーを作成した。色を塗るイラストには、各校から集めたキャラクターを用いて、その日がんばる項目を入れて発行した。



## (3) 家庭との連携

鯖江市内の小学校では、6月の学校公開日などを活用して、低学年の歯みがき教室を実施している。染め出しの後の児童の歯・口の様子を保護者に見ていただき、保護者に入門期の児童の仕上げみがきの重要性を知っていただく機会となった。

また、毎月発行している養護教諭作成の保健だよりには、歯に関する学級指導の様子や保健委員会の取組、う歯の治療率などの情報を記載した。配布の際は、ポイントを指導すると共に、保護者に渡すことを確認している。児童は、自分のクラスや友達のことが記載されているとうれしそうに何度も読み返すなど、意識の向上が見られた。

## III まとめ

### 1 成果

- (1) 食育アンケートを活用し、児童の実態に応じて目標や指導内容を吟味し、他の教育活動と関連させたカリキュラムを工夫することで、食育に対する児童・教職員の意識が高まり、地域の食文化継承の重要性を認識することができた。
- (2) 「SA歯ピカプロジェクト」の取組では、家庭・地域、関係機関と連携した活動や、児童の創意を生かした特色ある実践がなされた。校長が、リーダーシップを発揮して児童の実態や地区の実情を的確に把握し、体制づくりや実践の共有化に結びつけることで活動が活性化された。

### 2 課題

- (1) 健康で安全な生活を営む実践力を育てるために、市全体で取り組むことのよさを生かしながら、自校ならではの学校経営を円滑に進めるための校長のバランス感覚とリーダーシップが必要である。
- (2) カリキュラム・マネジメントをさらに推進するとともに、学校間や地域・家庭との連携を深めていくことで、児童生徒の多様な体験や経験の機会を増やし、生涯にわたって健康で安全な生活を営む実践力を育てていくことにつなげていきたい。